

ユニークな存在

著：伏見健二

1 ひとりだけの少女

あなたこそ、広いアランシア大陸でもとびきりユニークな存在だ。

明るい陽光が、草原を温かく照らしている。あなたはいくつか露出している岩の頭を、ゴムまりが弾むように飛び、そのまま強く握ったメイスを、オークの頭に叩き下ろした。

ぐしゃ、と。頭蓋が碎ける感触。

脳漿が飛び散るのをくぐり抜け、背中を向けて逃げようとするもう一体に迫る。勢いあまって、どん、と背中にぶつかった。そのまま、転がる。先に立ち上がり、目を回しているオークの顔面に、また振り下ろす。

ぐしゃ。

今度は潰れた鼻から多量の血液が、貴方の丸い胸甲に跳ねかかった。碧い瞳の下の、頬にも。

今日の獲物は、オークが二体。この汚れた生き物を駆除するのはドワーフの天命だと、あなたは信じている。まして相手が、あの美しく燃え立つような山頂の火吹き山を奪った、かの魔術師の配下であればなおさら。

そんな決意を胸に秘めたドワーフはたくさんいる。多くのドワーフにとっては、あれは昨日の出来事のようなものだ。

しかしあなたがユニークであるのは、ストーンブリッジ生まれのドワーフだ、ということだ。あなたは、あの山中に刻まれた王国を知らない。邪悪な魔術師が龍の力を借りて奪い取り、あなたの父親である偉大なドワーフ騎士ダルモレンをも一塊の炭へと変えてしまった。あなたの母

は悲嘆にくれながらも生き残りの仲間と共にストーンブリッジの街に逃げ延び、そこであなたを出産したのである。

街生まれのドワーフ。あなたは、新たなるドワーフの少女だ。

普通の生まれであったら、あなたは、ずっと太陽の光を知らずに育ったかもしれない。多くの氏族において、ドワーフの女性は秘められる存在であり、その姿を見せることはない。深い山の奥底に守り隠され、一年のほとんどを女たちだけの空間、『女房』で過ごすことになる。そんなドワーフの女の仕事は、子供を産み、育てること。

女性が伝統のくびきに縛られて抑圧されている氏族もあるし、そうではない対等で自由で重要な地位を占めている氏族もある。しかしいずれの場合にもドワーフ女性が大っぴらに姿を表すことは稀であるし、そうであった場合も男性に変装している場合が多い。

さらには他種族には決して語られることのない、ストーンブリッジのドワーフたちの秘密、というものがある。

それは、火吹き山でレッドウィード王国が滅びたとき、広大な地下王国の奥で身を潜めていたドワーフの女性と子供たちに、悲劇的な運命が待っていた、ということだ。それを語ることは辛いし、聞かされる者はもっと辛かろう。だから、それをあなたに語る者はいない、ということを理解してあげてほしい。脱出できた女性が少なかったから、というだけではなく、その悲しみゆえに、レッドウィード氏族のドワーフは、それから子供を設けることをしなくな

ってしまった。仲間意識が高いドワーフのことである。彼らを迎え入れた氏族においてもそうだとすることは理解してもらえらると思う。

ゆえに、ストーンブリッジに、あの悲劇以降に生まれたドワーフの子供は、いない。代わりに、決して口にすることはないが、共有している誓いがある。あの日に失われた、女性たちと、子供たちのために。怨敵ザゴールへの復讐をなしとげ、火吹き山を奪回したその日にこそ、改めて夫婦愛を確かめあって子を成すこともできよう、と考えているのである……。

その一方で、あなたは健やかに育っていった。地下深くで隠されながら養育されるドワーフの子供は、太陽の光を恐れるものが少なくはない。まるでトロールのように、太陽の光を恐れてしまうものも少なくない。勇敢なドワーフ！その勇敢さは、まずは太陽に向かう勇気を試されることだ！と知られたら、他種族の失笑を買うことだろう。しかし、あなたはまさに太陽の子だった。ストーンブリッジに暮らすドワーフは、洞穴で暮らすドワーフより開放的な性格の者が多いのだが、産まれながらの太陽の子であるあなたは、地下養育も知らず、集団女性房も知らず、地下牧場も地下農場も知らないまま、屈託なく草原で羊と戯れて育ったのである。そして、父の形見であるメイスを手にしてからは、小集団で現れるオークを狩ることに熱中するようになった。

* * *

あなたは鼻歌を歌いながら、さざめく小川のほとりで胸甲をはずすと、準備良く用意した藁たわしで洗い始めた。今日の戦果はこれで五体。まあ満足できる狩りだったと言える。しかし困ったことに、オークの血というのは、すぐに粘ついて落としにくく、ずっと抜けない悪臭を発するものなのだ。その血が飛び散って付着した

ことに気づいて、チュニクも脱ぐ。大地の女神ケリリム……人間社会ではスロッフの名で知られる父なるタイタンの娘……も、健やかなあなたの姿を見れば、ドワーフという種族を作ったことを心のそこから誇らしく思うだろう。陽光を浴びて、うねって流れ下る豊かな金色の髪は、周囲に輝きをまき散らしていた。小柄で未成熟ながらも発達した筋肉に覆われた頑健な骨格。肌の表面を覆う柔らかな体毛は、これも光の中で黄金の燐光を宿している。あなたは両の指をお椀のように揃えて、丹念に顔に浴びせて洗った。あごをこする。偉大なジリブラン王のように豊かな髭をたくわえるようになりたいが、それにはもう何年も時間がかかりそうだ。ドワーフ少女の髭。ふわっと柔らかい体毛が、ちょっと茂っているかな、というぐらいでしかない。

「おまえ、ドワーフか」

声がかかり、あなたは背筋を凍らせた。ぱつ、と濡れたチュニクで体を隠しながら、素早く、周囲に首を巡らせる。どこから？気配が感じられない……？

「はじめて見た。ドワーフのオンナの、ハダカ」

無遠慮な声が続けられなければ、本当に空耳とでも思ったことだろう。声の主は、ごく近く、岸辺の柳に身をもたれさせていた。いつからそこにいたのか。昼下がりの舗装路で動かないで暖まっているトカゲを見つけることより難しいだろう、とあなたは思う。それは、苺安の染料で染めたケープで身をくるんだ、痩せたエルフだった。



あなたは反射的にメイスを拾い上げると、バツ、と衣を振って水しぶきを浴びせかけ、顔を覆ったその死角から攻撃を繰り出した。

「速ッ!？」

エルフは驚きの声を上げ、それこそ髪の毛一本の差で、その攻撃をかわした。しかし、あなたもその瞬間に気づいていた。エルフはあなたよりももっと速かった。くるり、と身を翻すと、あなたの頭に手を置いて、ぐっ、と押しやった。

あなたはよろめいて水面に腰をつく。大きな飛沫が上がる。エルフはその反動で、対岸にとびすさって距離を置いた。

「あぶねえな。そんなに、怒んなよッ！」

エルフは怒鳴った。

「あたしもオンナだからッ！ オンナどうしなんだからッ！」

痩せたエルフは、ケープを拡げて見せる。

2 ひとりだけの友人

あなたはエルフを見ること自体が初めてだった。ストーンブリッジにエルフが訪れることはなくなっているが、ドワーフたちは積極的に関わりあおうとはしない。だから、乳房のふくらみも判らない体を示されても、痩せている生き物だなあ、よくこんな痩せている生き物が生きているなあ、ということを感じこそすれ、男なのか、女なのか、皆目見当がつかなかった。

エルフは『ヒークス』と名乗った。名前の意味を尋ねると、そういう草があるらしい。尖っていて、芯が固くて、矢を作るのにも向いている、とヒークスは事細かに説明をしたが、あなたには、まあ、アシの一種なんだろうな、ぐらいにしか理解できなかった。彼女は南方の森林地帯の隠し村に住んでいる森林エルフの部族の一員だった。女神ガラナ崇拝にことに力を入れ、非文明的に自然回帰することを志向していると

いう。

「植物はね、常に変化するスペクトラムなんよ」

ヒークスは熱っぽく語る。

「まあ生き物はどれだけってそうだな。あんた、アオガラの幼鳥とゴジュウカラの幼鳥の見分けはつくかい？」

それはエルフがお得意な分野でしょうけれど、ドワーフだって宝石と鉱物なら語れる、とあなたは無然と言いつつ返す。

「まあそうだな。ドワーフをバカにする気はないさ。まあ多くのエルフはドワーフのことをどんくさい亀野郎だと思っているけど、あんたのさっきの戦いぶりにはなかなか速かった」

あはははは、とヒークスは腹をかかえて笑った。薄い腹だなあ、と、あなたは思う。自分の毬のように丸く、みっちり筋肉と臓物が詰まった腹とはずいぶん違う。こんな薄い腹で、食べ物から栄養を絞り出すことができるのだろうか。いや、エルフはやはり樹液を舐めて生きているようなものなので、これだけで足りるというわけになるだろうか。では子供は？ 子供を産むときは、この腹もドワーフのように大きく膨らむのだろうか。

「あっという間に二匹も片づけた手際、すごいと思っただぜ」

身振りをしながらヒークスが語り続ける。一匹目のドタマをがち割り、二匹目を体当たりで転ばせて、鼻を叩きつぶして血しぶき……。おや、メイスで襲い掛かった件についてはなかったか、とあなたは頬を赤らめた。であればこのエルフはずいぶん前から自分を観察していたのだ。こちらはそれにまったく気づかなかったが。

「あんた、まだ相当に若いんだろ？ こんな幼いドワーフでこれだけ強いんだから、まあドワーフの強さってのはたいしたもんだな」

そう語るヒークスも若く見えるが、エルフはすごく長命な種族と聞いている。もう何百年も生きているのかもしれない。

「いや、逆に若くて小柄だから強いつてもありそうだな。オトナのオトコのドワーフは、もっとノロマなものな。力はきつものすごいし、体力だって余り余っているだろうが、戦いつてのは、やっぱ技術だね。つまりは速さだよ」

エルフは背中に手を回すと、瞬時に弓を番えてみせた。シュ、とかすかな風の音だけが聞こえた。そして次の瞬間には、弓を引き絞った姿で静止している。その静止した姿勢で、息吹音ひとつ聞こえはしない。あなたはまた、ひなたで動かないトカゲを連想した……。

実際、エルフの姿は、どうも爬虫類じみたところがある、とあなたは感じていた。エルフは美しい、とよく言われる。しかし、その美しさというのは自分にはいまひとつ判らない。細い腕、絞られた胸は、肉屋にぶら下がっている羽根をむしられた鳥を連想させて、「気の毒な感じ」と思ってしまうのだ。骨ばった感じは頸椎のふくらみが浮かび上がる首から、顔面へと続いていて、鼻筋などはえぐりこまれているように見える。ぎょろついた瞳を覆う瞼は忙しく動いて、どうにも向かい合っていて落ち着けない。赤い髪はレッドウィードを連想させて、きれいだな、と思わないではないが、それでも落ち着きなくうねって複雑なウェーブになる様子は、ドワーフの髪とはやはり違うのだ。

「まあ、強さももちろんだが、ドワーフの女の子は、きれいでかわいい、と判ったよ」

ヒークスはそう微笑みかけるが、ニコッと笑った口元が、ドワーフとはまた違う形で耳へと裂け広がるのは、正直、ちょっと怖かった。怖いと思うが、怖くない！とあなたは自分に言い聞かせる。ヒークスは優しく、率直で、友好的なのだから。

「エリリア様とケリリム様が、姉妹だっていうのは知っているかい？」

あなたはうなずいた。エリリアとは植物の女神ガラナのことで、共に創造神タイタンの娘で

ある。あなたは幼き日にきちんと神話の講話に耳を傾けていてよかった、と心から思った。

「じゃあ、エリリア様の娘であるあたしと、ケリリム様の娘であるあなたは、従妹どうしだよ」

ヒークスは自信をもってそう言ったので、あなたはその瞬間、自分がまさに神話の体系に組み込まれたような高揚を感じた。

「じゃ、あたしはそろそろ行く。あなたの天敵のオークどもをはじめとする混沌の勢力に汚されて、各地の精霊たちも安全に暮らせる場所が少なくなってきたからさ。それが根絶やしにならないように安全な場所を作って歩くのが、私の使命ってわけ」

そう言って、ヒークスは先ほどまでもたれていた柳の木に、祝福の言葉を捧げた。それはエルフの舌でしか発声することのできない古い詩であり、神代から密かに伝えられる力のある言葉だった。それでもドワーフの少女であるところのあなたの柔軟で繊細な耳には、かろうじて聞き取ることができた。それは優しい芽吹きの詩だった。

「それでは我が従妹さん！ 縁があったらまた会おうぜ」

そう言って、ヒークスはまた素早い動きで弓矢をたばさむと、微笑みかける。うん、と応えることだけが、あなたには精一杯だった。表現する言葉を知らない感謝と、感動を伝えることは難しく、胸をはって、ぎゅっと口をつぐんで、頭を下げる。エルフは軽く手を挙げただけで別れの挨拶とし、そのまま振り返らずに歩み去って行った。軽やかな足運びはドワーフの小走りよりもなお速く、あなたはその姿を目に焼き付けておきたいと思ったが、それはほんの少しの時でしかなかった。

3 ひとりだけの旅立ち

エルフのヒークスはその年のうちに、旅の空の下ではかなく命を落としたのだが、それを知る者、伝えることのできる者は誰もいなかった。それでも、あなたはなんとなく曖昧にそんなことを感じ取って、自分の『従妹』の魂がその母であるガラナの神宮に迎えられたこと、そしてその寵愛を受けて神の庭の手入れをしているであろうことを想像した。

あなたは、一年の間にずいぶん成長した。体も大きくなり、使い慣れたメイスの他に、しっかりとしたバトルアックスも手に入れた。牧場の周りにぐるりと杭を立て、その一つ一つに狩ったオークの頭蓋を飾れるぐらいの戦果も上げた。それが威嚇になり、襲撃の抑止になるのではないかと、との牧場主の試みであったが、やはり臭くて汚いし、山羊の乳の出も悪くなる、ということで、一週間もたたない経たないで片づけることになった。牧場主にはこれまでの感謝として、初めて倒したトロールの首も贈ったが、それは再生して『トロールが生えてくる』のではないかと恐れたおかみさんに炭焼き小屋で焼却されることとなった。まあ考えてみればトロールのトロフィーなんてろくな洒落でもないし、処分したおかみさんが正しいだろう。

「旅に出るなら、なぜ我らの戦団に加わらぬのか？」

そう怒りと共に勧める者もいた。ストーンブリッジには、いくつかのドワーフ傭兵団がある。それぞれが、この地を經由して火吹き山に向かおうという人間たちに力を貸したりもしているのだが、あなたはそれに参加するということは選ばなかった。一つには、一人で戦うのに慣れていたので、というのがある。あなたの躍動するような戦い方は、今なおユニークなものであり、それに合わせられるドワーフはいない。また女性のドワーフとして、男のドワーフたち

と共に旅をする難しさも感じていた。なにしろドワーフは「男女、そもそも席を同じくせず」の伝統に縛られている者は多いのだ。

「いや、そなたは多数の敵と戦う危険さを知らんだけじゃ」

そう言う者もあった。

「実力どうこうじゃあねえ。戦いは数なんだ！」

あなたは正確には成人を迎えてはいなかったが、それでもドワーフ戦士のバブからつまみだされることはなく、ビールジョッキを抱えながら、男たちの手柄話に耳を傾けることが許されていた。そこには確かに実戦のなかで参考にするべき貴重なアドバイスがあったのだ。

「それでも！ 人生には、相方が必要だと、俺は、お前に、言いたい！」

酔った勢いであなたにそう迫るドワーフもいたが、すぐに他の男ドワーフに引きずり戻されて、拳骨でぼこぼこにされ、前歯を失って路地裏に捨てられるのが関の山だった。いかに開放的なストーンブリッジの街でも、酔った勢いで求婚するのはドワーフの流儀に反しており、その代償は軽くはないのだ。あなたは気づかずにきょとんとして聞いていたが、あとになって微笑ましく思い出すことはできた……そう語りかけてきたドワーフ男の顔までは思い出せなかったが。まあその頃、ストーンブリッジのドワーフは歯が欠けた奴が増えたのだった。

* * *

その日、あの柳の木に、いってきます、と囁いて、あなたは旅の荷物を担ぎなおした。ドワーフの女の荷物は多いのだ。愛用の鍋も手放せないし、編み針や刺繍糸もひとつとおり持って出かけた。柳の木には伸びたビャクダンが絡みついて、不思議な香気を発していた。そこに、あのエルフがもたれかかっている姿を、一瞬だけ幻視した。

『あたしとあんたは、従妹同士だね』
という囁きを耳元で感じた。

あなたは、あのときのように、うなづく。
戦いにゆく、ではなく、安全な場所を作りに行く、というヒークスの表現はしっくりくるように感じた。記憶のなかのあの囁きのような祝福の詩を口にしようと思ったが、やはりドワーフの舌では難しかった。少女の年代から離れてゆくと、あの耳に残った響きも消えていってしまうのだろうか。一人で旅立つが、それは、また出会うための旅立ちなのだ、とあなたは自分に言い聞かせる。出会ったあなたにヒークスがそうしたように、親しみをこめて微笑みかけられるように。これから、異教平原に歩を進め、いくつか散在している離れ里へ、悪の魔術師がい

かほどの影響を及ぼしているのかを確認するつもりだった。ドワーフ一人の足なら、本当に道のない荒野も踏破できる。また『裏街道』を作って移動するオークたちの動向にも、より柔軟に調査を進めることができるはずだった。

今、ドワーフの新たなる少女が旅立つ！
それは、邪悪と混沌に対する、反攻の時代の始まりであった。

あなたは、あごをこする。ふっふっふ、とあなたの唇に満足げな笑みが浮かぶ。

髭だ！ やはりふわっとした柔らかい髭だが、ドワーフらしい立派な髭が、金色に輝く髭が育ってきているのだ！

<FIN>

